



労働としてのセクシュアリティ：再生産労働論の再 検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊田, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004801

論文

労働としてのセクシュアリティ：再生産労働論の再検討

伊田 久美子

はじめに

本稿の目的は70年代イタリアの家事労働論が論じた労働力再生産労働としてのセクシュアリティに改めて焦点を当て再検討することである。またそれをふまえて、現時点で可能な範囲ではあるが、今日の市場社会における労働力再生産の変容の考察を試みる。

「個人的なことは政治的である」というスローガンに代表されるように、家族・個人生活における女性の差別抑圧は第二波フェミニズムの主要かつ特徴的な問題領域であった。身体・セクシュアリティの領域における女性の差別抑圧を告発したラディカル・フェミニズムに対して、マルクス主義フェミニズムは差別抑圧だけではなく搾取の観点から、その物質的基盤として家事労働を論じたとされる（上野 1984、1990他）。両者はともに第二波フェミニズムの一翼を担う潮流であり、事実ラディカル・フェミニズムとマルクス主義フェミニズムはreproduction（生殖＝再生産）という共通項で結びついている（伊田 1992、2012）。にもかかわらず、第二波フェミニズムの課題は「身体・セクシュアリティ」と「家事労働」の2本立てで、前者はラディカル・フェミニズム、後者はマルクス主義フェミニズム、という「分業体制」によって取り組まれたように見える。

ラディカル・フェミニズムは自らの身体・セクシュアリティの自立を求め、後にリプロダクティヴ・ヘルス・ライツ¹として包括される課題や性暴力、性の商品化などの課題に取り組んだ。マルクス主義フェミニズムは女性が多くを担う家事労働を女性の劣位の基盤として議論し、アンペイド・ワークの測定評価政策にインパクトを与えた²。セクシュアリティは生殖とともに、ラディカ

¹ 1994年カイロで開催された国際人口開発会議（ICPD）で提唱された。

ル・フェミニズムのもっとも特徴的な課題を構成している。リプロダクティブ・ヘルス・ライツは「性と生殖の健康と権利」³と邦訳されてきたように、セクシュアリティを含む概念として用いられている。他方、リプロダクションを労働として論じるマルクス主義フェミニズムでは、reproduction（生殖＝再生産）は、次世代労働力を再生産する出産育児、および労働力を持続的に回復させる生活関連の労働として論じられた。80年代に登場する感情労働、ケア労働のような労働拡張概念もまた、基本的に性的な要素を回避して論じられてきたし、セクシュアリティが焦点化する課題は「労働」としてではなく、「女性に対する暴力」「女性の人権の侵害」として論じられてきたと言える。

しかし、マルクス主義フェミニズムの初期の家事労働論はセクシュアリティを論じていた。家事労働を資本主義下の労働力生産・再生産の労働であると定義し、性と生殖をその中心的機能として位置付けていたのである。家事労働論争が経済学分野において精緻化する一方、開発経済学分野で無償労働の評価方法の研究が進展していったが、初期の家事労働論が論じた労働としてのセクシュアリティは学術研究としての展開に受け継がれることはなかった。再生産労働論は性的な要素を消去して経済学領域における市民権を得たということになる。本稿ではこの消去されてきた労働としてのセクシュアリティという議論に改めて焦点を当て、その今日的意義を検討したい。

本稿の構成は次のとおりである。第1節で初期マルクス主義フェミニズムの代表的家事労働論の論考であり、今日も広く言及されるマリアローザ・ダラ・コスタ『女性の力と社会の転覆』（1972＝1980）におけるセクシュアリティに関する議論を紹介し、第2節で同時代のフェミニスト、マリア・ミース（1986＝1997）、および家事労働論争の論客であったヴェロニカ・ビーチ（1987＝1993）によるこの論文の評価の検討から、セクシュアリティに関する議論の不在を確認する。第3節では家事労働賃金要求運動の論客であるシルヴィア・フェデリーチ（1975）、およびジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタ（1978

² このインパクトは基本的に間接的なものではあるが、1985年にナイロビで開催された第3回世界女性会議におけるセルマ・ジェイムズのロビー活動が無償労働の評価の必要性を記述するナイロビ将来戦略第120条の実現に大いに寄与したことは銘記したい。

³ SRHR（Sexual reproductive health and rights）と「セクシュアル」を冒頭に追加して用いられることも多い（ジョイセフ（JOICFP）HP <https://www.joicfp.or.jp/jpn/why/rh/> 閲覧期日：2019年1月22日）。

=1991) を検討し、家事労働賃金要求運動において労働力再生産労働としての家事労働にセクシュアリティが占めていた中心的位置を確認する。このような労働としてのセクシュアリティ論をふまえて第4節で近年のセックスワークをめぐる議論を概観し、論点整理を試みる。最後に、本稿の議論をふまえ、フェミニスト・ポリティクスの主要な交渉の場を構成してきた労働力再生産とセクシュアリティをめぐる状況の近年の変容について、現時点での考察を試みる。

1. 受動的な生産性：マリアローザ・ダラ・コスタ『女性の力と社会の転覆』における労働としてのセクシュアリティ

『女性の力と社会の転覆』 *Potere femminile e sovversione sociale* は、1972年にセルマ・ジェイムズとの共著⁴として刊行された。セルマ・ジェイムズによって直ちに英訳されたため英語圏にも多大なインパクトを与え、その後にいわゆる「家事労働論争」と呼ばれる英語圏での論争の口火を切ることになった⁵。

家事労働論争は70年代中頃から、イギリスの左翼系学術誌⁶を中心に展開した (Molyneux 1979, Kuhn & Wolpe(ed.) 1978=1984, 足立 1992, 古田 1997, 伊田 2010)。この論争は基本的にマルクス主義経済学分野において展開し、マルクス理論における価値をめぐる議論が中心を占めた。それは一つにはこの論争が、家事労働を労働力という資本主義に不可欠の要素を商品という交換価値として生産する労働であり、それが不払いであることによって、賃金労働者以上に剰余価値を生産しているという、ダラ・コスタ論文のマルクス主義理論の「常識」を超えた主張への反応に端を発していたからである。しかしこのよく知られた議論に続いて、「受動的な生産性」と題した、資本主義におけるセクシュアリティの機能についての議論が展開されていることについては、管見の

⁴ ジェイムズの1953年に書かれた論文「女性の地位」 *Il posto della donna* を収録している。またこの論文についての詳細解説は伊田 (2010) を参照されたい。

⁵ この論考はダラ・コスタ個人というよりは、ロッタ・フェミニスタ (LF) として展開したフェミニズム運動が作り出した分析・考察である。個人の名前での論文刊行にはグループ内で異論や反発もあったが、個人が代表して運動の理論と主張を形にすることは有益であるとするセルマ・ジェイムズの意見もLFの内部資料に残っている (Fondazione Badaracco, Archivio Femminista, 1-625, busta73, Fascicolo8)。

⁶ 代表的な媒体はCSE (The Conference of Socialist Economics: 社会主義経済学会誌) である。

限りではあるが後の諸論の言及は見当たらない。

ダラ・コスタ（1972=1980）によれば、資本主義にとっての生産性とは次世代労働力商品の再生産機能の発揮とともに、労働力商品の「欲求不満の解消」である。著者は結婚までの禁欲、および結婚後は出産目的に限定された女性のセクシュアリティの抑圧を、性的な受容性と再定義し、それ自体が生産的である、と述べる。性的受容性の生産性とはまず第1に、資本主義的抑圧と権力の羨望のはげ口として機能することである。つまり社会的緊張の安全弁としての機能である。第2に女性個人としての自立が否定されることにより、女性の欲求が家庭に集中し、家事への没頭（昇華）として生産性が向上することである（Dalla Costa 1972=1980: 190）。

単調な家事の生み出す「欲求不満」は、女性の強制される性的受容性と別物ではない。「性的な創造性と労働における創造性」はどちらも「天性の活動と、習得した活動の相互作用」に自由な活動の余地を与える要求が必要な領域であり、その両方が抑圧されている、と著者は述べる（ibid.: 191）。

女の受動的な性的受容性は、強制的に小ざっぱりした主婦を生み出し、単調な流れ作業を、かえって治療効果のあるものにすることができる。（ibid.: 191）

ここには労働と関連させながら、女性のセクシュアリティの自立の要求という、ラディカル・フェミニズムと共通の問題意識が明確に示されている。

今や我々はセクシュアリティを創造性の他の側面と統合し始めるようになり、また労働が女の存在と個人の能力を骨抜きにする限り、……セクシュアリティは常に抑圧され続けることを理解できる。膣の神話を粉碎することは、従属と昇華に対抗するものとしての女の自立性を要求する。しかしこれは単に、膣に対するクリトリスの復権ではない。それは子宮に対する膣とクリトリス双方の復権なのである。（ibid.: 192）

膣は主に、商品として売られる労働力の再生産——これこそが子宮の資本主義的機能なのだが、——への通路であるか、あるいは、我々の自然の力、

すなわち女の社会的装置の一部であるかのどちらかだ。性行動は結局もつとも社会的な表現であり、人間のもっとも深いコミュニケーションなのである。(ibid.: 192)

つまり「子宮の資本主義的機能」(ibid.: 174)をはたすための労働力再生産機能としてのセクシュアリティではない、自立したセクシュアリティを女性運動は求めている、と主張しているのである。

資本主義におけるセクシュアリティは労働力再生産の一機能に貶められている、とダラ・コスタは述べる。

資本は異性愛を宗教にまで高めると同時に、実際には男と女が身体的にも、情緒的にも、互いに触れ合うのを不可能にしている。つまり資本は性的・経済的・社会的規範とならない異性愛を拒否しているのだ。(ibid.: 176)

労働力再生産労働としての家事労働とは、家事育児介護などの諸活動だけではない。情緒的・性的な従順さ、性的受動性といった、セクシュアリティの主体的な表現を阻む女性の性的規範こそが生産的であり、そのような生産的セクシュアリティこそが求められているのである。

すでに述べたように、この論文が大きな反響を得て家事労働についての論争を促し、今日に至るまで広く言及されているにもかかわらず、労働や生産性とセクシュアリティ規範に関する議論は受け継がれることはなかった。次節では代表的フェミニストによる本論文の論評により、この不在を確認する。

2. 労働としてのセクシュアリティ論の不在：ミース、ビーチによるダラ・コスタ(1972)の評価

マリア・ミースはフェミニズム運動を歴史的に論じる論考において家事労働賃金要求運動に言及し、家事労働論争の本格的開始以前に「イタリアで1970年代はじめに労働闘争の文脈内で政治問題として提起された」と述べている(Mies 1986=1997: 46)。ミースは「この論文の中で家事は「非生産的」であるとする古典的なマルクス主義者の立場がはじめて挑戦を受けた」(ibid.: 46)

とし、それに続く「イギリスと西ドイツで起こった「家事労働論争」は、フェミニスト理論に重要な貢献をした」とする⁷。つまり家事労働は労働力商品を生産する価値生産的な労働である、という主張として紹介されている。ミースもまた家事労働を「無賃労働」として論じ、「主婦化」という画期的概念を提唱している。

しかし、ミース論文は、「身体の政治学」という的確な命名とともに70年代フェミニズムの身体、セクシュアリティに関わる問題提起を論じているにもかかわらず、ダラ・コスタ論文の感情労働的側面については触れているが（「家事労働は愛、世話、いたわり、母であること、妻であることなどのかたちをとった」*ibid.*:47）、セクシュアリティについての考察に言及してはいない。そして「家事労働論争」は「ダラ・コスタとジェイムズの本に続いて、……起こった」のであり、イタリアでの問題提起は「多少とも学問的な言説に変質するまで」のことで位置付けられている（*ibid.*:46）。

家事労働論争の意義として指摘されるのは、家事労働が学術的に議論されることによって、家事は労働であり、消費活動や余暇活動ではないという家事の労働としての定義、および学術的研究対象に値する課題である、という共通認識が形成されたことなどである⁸（古田 1997、2002）。つまり「学問的言説」として展開した家事労働論（1973～1979年）からは、ダラ・コスタ（1972）では言及されていた労働の視点からのセクシュアリティ論は論点にさえなっておらず、労働力再生産労働としてのセクシュアリティという論点は、その後の学術的議論に受け継がれることはなかったし、そのことにミースもまた関心を向けることはなかったように見えるのである。

家事労働論争の論客の一人であったヴェロニカ・ビーチ（1987=1993）も、ダラ・コスタ（1972）に言及し、次のように述べている。

この時期の最初の主たる理論的論争は、セルマ・ジェイムズの冊子とマリ

⁷ 私たちはすでに1960年に日本の論壇で同様の問題提起があったことを知っている（磯野 1960、上野編1982所収）。これについては上野（1995）で論じられている（上野 2002所収）。

⁸ 男性経済学者たちの論争への参加が家事労働論争の学術的市民権を得るのに貢献したとの指摘もある（上野 1990、古田 1997）。男性の参入により市民権が得られるという現象は少なからず生じてきた。例えば派遣労働などの非正規労働の社会問題化はその典型と言えるだろう。

アローザ・ダラ・コスタの冊子⁹により刺激を受けたものである。多数の社会主義フェミニストたちは、とりわけ左翼政治に対するあまりにも批判的すぎると思うジェームズらの姿勢と、マルクス主義の概念の無頓着な利用とに憤激した。その上、多くのフェミニストは、女性の家事労働に対して賃金を支払うことを反動的だと感じていた。なぜならそれは、女性を家族から解放するよりは、むしろ、家庭内での女性の地位を制度化するものだからである。(Beechey 1987=1993: 7)

そしてビーチもまた、この論争は「70年代後半には、もっと学問的な形をとり、主流の左派系雑誌に発表された」(ibid.: 7)としている。彼女の論においても、セクシュアリティやジェンダー関係の課題は労働論とは切り離されており、家事労働論におけるセクシュアリティ不在は当然の前提であったように見える。ビーチはさらに、女性の地位を決定する四つの構造として生産、再生産、セクシュアリティ、社会化をあげ、家族イデオロギーとしてのセクシュアリティを重視するジュリエット・ミッチェルの議論(Mitchell 1971)を取り上げ、労働市場での女性の地位の不在を批判している(ibid.: 9)。しかしビーチにおいてもビーチが批判するミッチェルにおいても、労働としてのセクシュアリティという論点は不在である。

このようにミースの評価もビーチの評価も、ともにダラ・コスタが論じる再生産労働としてのセクシュアリティ論については全く触れることもなく、批判の対象にすらしていない。その一方で、両者とも70年代フェミニズムの最重要課題として身体、セクシュアリティ、ジェンダー関係などを労働(家事労働を含む)論とは切り離して論じているのである。女性の立場からのセクシュアリティ論は第二波フェミニズムの共通課題である。にもかかわらず、それを労働として論じる視点はフェミニズムの中でも周辺に止まり、広く共有されることはなかったと言えるのではないだろうか。

⁹ これらの「冊子」とは1972年に出版されたジェームズとダラ・コスタの共著のことと思われるが、別に刊行されたJames (1972)を示している可能性もある。

3. 労働としてのセクシュアリティをめぐる議論と運動の展開：フェデリーチ、G.F.ダラ・コスタ

70年代フェミニズム運動は「身体の政治」として進展した。イタリアでも女性の性的主体としての自立と自己決定はフェミニズム運動のもっとも切実な課題であった¹⁰。

また、イタリアの70年代フェミニズムには労働としてのセクシュアリティが理論としても運動実践としてもかなりの広がりや展開を示すような運動が存在していた。フェミニストグループ、ロット・フェミニスタ（LF）が開始した家事労働賃金要求運動は70年代イタリアのフェミニズム運動の中で、規模的にもその特色ある運動スタイルにおいても、かなりの存在感を示していた。LFは政党系以外で全国に支部が展開した例外的なグループであり、ユニークなポスター、歌、動画などにより大きなインパクトを与えた。LFの1974年の解散後も、家事労働賃金要求委員会としての活動は各地で展開した。その活動は中絶裁判、女性の診療所、女性運動資料館の設立と運営に及んだ（伊田 2014、2015）。

この運動の主張は80年代以降に登場するケア論、感情労働論を先取りしている。家事労働賃金要求運動の代表的論者の一人であったシルヴィア・フェデリーチは1975年のイタリアでの講演録*Salario contro il lavoro domestico*の中で、次のように論じている。

家事労働は単に女に負わされただけでなく、女の肉体や女らしい性格の自然の属性、女の本性の奥深くから出てくるものと推測される内面的欲求、切望にまで変形させられた。（Federici 1975: 2）

..... 私たちの女としての役割とは、無給の、だが幸福な、そして何よりも男性労働者——すなわち資本がその社会的力の大きさを認めざるを得なかったプロレタリアートの男たち——にすっかり惚れ込んだ女召使いであ

¹⁰ イタリアの70年代フェミニズムの象徴的ジェスチャーは両手の親指と人差し指を組み合わせて女性器の形をつくるものであった（Bussoni & Perna (ed.), 2014）。

ることなのだ。神がアダムの気にいるようにエヴァを造ったのと同じ方法で、資本は肉体的に、精神的に、そして性的に、……男性労働者にさえさせるために、主婦を造ったのである。(ibid.: 2) (下線は筆者)

フェデリーチは「自然の属性」「女の本性」に変型されたものが労働に他ならないことを指摘しているが、それはまさしく続く時代の「ケア労働」「感情労働」としての労働概念の拡張を先取りしている。そしてそこには「性的」奉仕が含まれていることを指摘する。

ジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタ『愛の労働』(1978=1991)は、労働としての「愛」を本格的に論じた、ケア論の先駆的議論の書であるが、ここでもまた、のちに登場するケア論が触れることのない労働としてのセクシュアリティが論じられている¹¹。

彼女は「労働契約としての結婚の定義」から、労働力再生産労働者としての家事労働者の職務の「その中心を占める」のは「性的職務」とであると述べる (G. F. Dalla Costa 1978=1991: 56)。

……性的労働に関して資本が非常に厳格な規律を強要するのは、明らかに資本がこの労働によって労働力の再生産を確保しなければならなかったからである。……労働力の再生産は家庭の中でこの性的労働によって行われ、それによって資本は家庭の再生産をも確保してきた。したがって女の性交渉は、新しい労働力を生み出すためか、あるいは男を性的に慰めて、肉体的、精神的に再生産するためのものであり、家事労働である。(ibid.: 56)

……女が男のために常に無償で供給させられている労働の中でも、性交渉が中心的職務であることが明らかになればなるほど、そこに愛というものが存在する可能性は少なくなっていく。それゆえに性交渉は家事労働なのである。(ibid.: 57)

¹¹ 菊地 (2015) もジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタ (1978=1991) の家事労働論における性的職務の中心性に着目した考察を行っている。

女は妻となるために性的職務を行わなければならない。なぜなら結婚においては性的職務がその中心をなしているからである。家事労働のその他の職務に比べて、それは避けることのできない優先的な職務なのである。……同じ家の中の他の女たちに対して、妻としての地位を格づけるのは、この性的職務の遂行である。(ibid.: 58)

著者はさらに、女性に対する暴力の問題を、この労働としてのセクシュアリティの観点から考察する。性的職務と同様に「愛」や「女の属性」によって隠蔽される労働関係は、暴力に及んでいる、と著者は述べる。夫の役割は、資本や国家の代理人とも言えるものであり、彼は「愛の契約」に違反した「働かない」女を「愛が不足している」という理由によって殴る。「働かない」とは家事労働の職務遂行を不十分とみなす判断である。その中心的職務が性的職務であることが、この労働関係を一層暴力的なものとする。

しかし性的職務は最も暴力的であるがゆえに、女性たちによる拒否の長い歴史がある、と著者は述べる (ibid.: 60)。とりわけ女性運動の進展により、女たちは家事労働削減の要求を強めてきた。中でも性的職務は真っ先に拒否されるものの一つである、と著者は言う (ibid.: 69)。つまり男を慰める労働としての受動的セクシュアリティを拒否して、自らの快樂としてのセクシュアリティの要求を強めているのである。

その一つがレズビアン運動である (ibid.: 70)。女性とともに暮らす選択は、資本主義的生産的ヘテロ・セクシュアリティに対する痛烈な攻撃である。もう一つの選択は売春である。

……性的職務は家事労働の中心的職務であるばかりでなく、女がそれによって妻として生存を確保するか、あるいは売春婦としてカネ……を稼ぐことのできるものであるがゆえに、男の側からすると、強姦は、労働力再生産に関する女の労働条件に対してのもっとも凶暴な攻撃となっている。(ibid.: 71)

こうした売春婦や同性愛の女たちの行動を、著者は「ひとりぼっちの反乱」

と呼ぶ (ibid.: 86)。

彼女らは「愛の契約」の基本的規律を否定して、自らの「運命」を安逸に逃れ、それによって家庭－国家間の均衡状態を極めて深刻に脅かす。(ibid.: 86)

家事労働の中心的職務である性交渉をカネで契約しようとする売春という行為は、無償の愛による供給を有償化することによって愛のイデオロギーによる労働力再生産体制を根幹から揺るがす危険な行為である。それゆえに売春行為は制度によって厳しく統制され、かつ売春婦の生活は悲惨なものとして宣伝され、売春という選択の代償を高くつくものとしなくてはならない。売春は犯罪化され、売春婦が被る暴力は無視されるのである。同性愛もまた、セクシュアリティを異性愛の規律から解放することによって「生産的」異性愛主義を脅かすものとして警戒される。

著者は売春婦や同性愛者の闘いを、労働力再生産労働としての生産的セクシュアリティを拒否する闘いに位置付け、70年代に欧米で起こった当事者運動を記述する。

1975年にはフランスで、1976年にはアメリカ合州国で、大規模な売春婦の運動が生じた。著者は、その後に生じた売春婦への激しい弾圧も含めてこの運動を紹介している。

フランスにおけるこの運動の盛り上がりのきっかけは売春婦が次々と殺害されるという事件であった。……当時フランスでは、売春婦たちは街頭に溢れ出て、教会を占領した。(1976年に大規模な売春婦の集会が開催された) リヨンは階級闘争における歴史的転換点となった。……アメリカ合州国における売春婦の最大組織(「コヨーテ」と「ピューマ」)は国家に家事労働に対する賃金を要求している。(ibid.: 140-141)

家事労働論の中心的領域を占めていた労働としてのセクシュアリティ論は、「主婦」と「働く女」だけでなく、「良い女(主婦)」と「悪い女(売春婦)」の、さらには同性愛者、独身者との分断を超えて女性、さらには「男らしくない」とされる男たちとの連帯を可能にする展望を備えている、と著者は論じる。

4. 売買春をめぐる論争：「女性に対する暴力」と「セックスワーク」

すでに見たように、労働力再生産という資本主義にとって不可欠の機能を論じた70年代の問題提起は、家事労働論争において「学術的」議論として展開した。その一方で、同時期に経済のグローバル化の動向において生じたWID（開発における女性）による経済活動への女性の無償の貢献への関心は、国際女性年に始まる世界女性会議と国連女性の十年の取り組みを経て、家事労働を生活時間調査や無償労働の貨幣評価の対象とし、経済活動としての評価を進めてきた。さらには同一価値労働同一賃金の実現に向けて取り組まれるようになった職務評価において、育児介護看護などケア労働が要求する情緒的負担がエフォートとして組み入れられるに至っている。

一方、90年代に入って女性に対する暴力は人権問題として焦点化してきた。性暴力、セクシュアル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンスなど女性に対する重大な人権侵害への取り組みがグローバルに進展し、強制売春や人身取引に対する政策的関心が高まっている。同性愛を含む性的「マイノリティ」の人権問題への政策的対応は近年著しく進展し、さらには枠組みの見直しによる性の多様性SOGIとしての問題提起により、社会問題としての市民権を確立しつつある。

売春もまた、以前のような女性自身の「矯正」を主要な対策とした枠組みから女性に対する暴力の問題として位置付けられるようになり、売買春、あるいは買売春として、買い手の大半を占める男性を視野に入れた問題設定へと変化していった。

このような80年代以降の展開のいずれにおいても、家事労働賃金要求運動における労働力再生産労働の中核を占めるものとして位置付けられていた労働としてのセクシュアリティ、「性的職務」は見当たらない。家事労働が「学術的」かつ「政策的」水準において論じられるようになった時点で、この論点はすでに抜け落ちていた。当初は一体として提起されていたセクシュアリティ、リプロダクション、労働は、暴力・人権と労働・経済に分解して展開したのである。この「分裂」によって、両者をつないでいた「労働としてのセクシュアリティ」論は、時折話題に上る当事者運動を取り残したまま、忘れられていたと言える。近年のセックスワーク論の登場は、この忘れられた論点の再検討を促すもので

もあると言えるのではないだろうか¹²。

セックスワーク論は当事者運動の切実な具体的要求から登場した。セックスワーカーは生計を立てるために労働者として働いている。にもかかわらず、この労働は労働問題としてではなく、暴力や貧困その他多様な社会問題の被害者救済としてのアプローチが当然視され、当事者の主体性が十分に尊重されてきたとは言えない。セックスワーカー運動が世界的に広がる中、売買春に対する法制度も変化しつつあり、アムネスティ・インターナショナルは2015年に「非犯罪化」の方針を表明している。

しかし今日未だに強固に存在するセックスワーカー当事者の倫理的自己責任の当然視やスティグマ化は論外としても、この問題への女性に対する暴力の視点からのアプローチとセックスワークとしてのアプローチの対立は克服すべき課題として焦点化している。ジェンダー法学会の2018年度学術大会シンポジウム¹³はこの課題への正面からの取り組みとして注目される。なぜならセクシュアリティは70年代以来のフェミニズムの中心的課題であり、とりわけ90年代以降は国際社会の積極的な取り組みが展開しているにもかかわらず、セックスワーク論についてはある種の当惑が払拭しきれていないのではないかと思われるからである。

シンポジウムでは暴力被害者支援のアクティビストとセックスワーカー当事者運動の支援活動を進めるアクティビスト、それにこの問題への新たな制度改革を進める海外の情報などの報告があり、またシンポジウム司会者でもあるコメンテーターの谷口洋幸によって、国際人権における性売買の定義や位置付け¹⁴が紹介された。谷口の、現状における性的主体性の男性への偏在、そして女性の性的主体性の回復が目指されるべきであるという指摘は、70年代フェミニズムの出発点が4半世紀を経て国際標準になりつつあることを示してい

¹² 家事労働賃金要求運動グループで活動していたフォルトゥナーティの労働力再生産と売春の関係を論じた著作 (Fortunati 1981) は1995年に英訳されているが、近年になって改めて注目を集めている。この著作は韓国語にも翻訳され韓国のセックスワーカー運動に理論的影響を与えている。この著作及び運動へのインパクトについては稿を改めて論じたい。

¹³ 2018年度ジェンダー法学会第16回学術大会シンポジウム「性売買と人権・平等」(2018年12月1日立正大学にて開催)

¹⁴ セックスワークとは「未成年、人身取引、強制による売春とは区別して、18歳以上の者が性別(女性、男性、トランスジェンダーなど)にかかわらず、合意に基づいて行う」行為と定義し、非犯罪化を提唱している。

る。再生産労働の中心にセクシュアリティを位置付けていた初期マルクス主義フェミニズムの理論と実践を歴史的に振り返り、再生産労働論からセクシュアリティが抜け落ちていったプロセスを改めて問い直すことには今日的意義があると考えられる。

一方、労働力再生産をめぐる情勢も、売買春を含む性産業の状況も70年代とは大きく変化している。本稿の最後に、この新たな状況をどのように理解し見通していくべきかについて、現時点での可能な考察を述べたい。

5. 労働力ポリティクスの変容：再生産の市場化とさらなる性化

身体・性・生殖は第二波フェミニズムが従来の公私区分を超えて取り組んだ課題であった。具体的には中絶の自由化を含むリプロダクティブ・ヘルス・ライツ、女性の自身の身体と性についての自己決定権、家族や個人生活における男女間の権力関係、女性に対する暴力問題として論じられ、大きな政策的成果をもたらした。セクシュアル・ハラスメントやドメスティック・バイオレンス、そして性暴力、ポルノグラフィなど、女性に対する暴力は、女性の人権とともに近代的法体系における公私区分の変更の実現に至っている。

一方、労働の視点からのセクシュアリティ論はフェミニズムにおいても労働論においても微妙な位置にある。売春を含む性産業における女性を暴力や差別の犠牲者、被害者としてみる視点に対して、労働者としてみるセックスワークの視点は労働論やフェミニスト経済学においても今なおほとんど位置付けられておらず、様々な見解の相違が未整理のまま、難しい問題として棚上げされてきた。

しかし女性労働問題を歴史的に振り返れば、そこには常に「性的逸脱」としての「売春問題」が伴われていた。女性を労働市場から排除する言説には、(性的に) 墮落した女、売春をやりかねない女、男を墮落させる女、といった、「性的逸脱」が、体力や産む機能の保護に先んじて登場してきた (Scott 1988 = 1992、姫岡 2004)。スコットは「女性労働者」という語自体のスティグマ性を指摘している。日本においても「女工」は『女工哀史』がその典型であるようにヴァルネラブルな弱者として描かれる一方で、性的「墮落」予備軍としてのスティグマ性を持つ、憐れみと蔑視のニュアンスを伴う差別的な語でもあつ

た。売春防止法に基づく女性の「保護」は、主に貧困などを想定要因としてではあるが、売春という違法行為を行う恐れがあるとみなされる「おそれのある女子（要保護女子）」も含めての「保護・矯正」として運用されてきた。この古典的図式は、近年の日本社会における貧困の深刻化の中で、「フーズクと若い女の貧困」として再登場している。多くのルポルタージュや報道番組が若い「貧困女子」を追いかけている。長年無視されてきた女性の貧困が注目され始めたとはいえ、貧困は若い女だけを直撃しているのではない。中高年の非婚単身女性の貧困もまた極めて深刻である。もちろん貧困の世代間連鎖など、若年層固有の課題があることは確かだが、それでも女性の貧困という課題における関心が、性産業における「商品価値の高い」若年層へと集中していく言説の偏在についても、注目する必要がある。

コストのかからない労働力再生産労働装置としての女性の心身と規範の全体を管理統制してきた資本主義は、近年多産・少子化など労働力の量的コントロールにも、おそらくはその質的コントロールにも失敗してきた。女性の主体的変化により性と生殖の規範に従来以上に「従順」ではなくなってきたことは、その主な要因の一つと言えるだろう。そうした女性の変化は、女性の地位向上や男女平等の実現、特に育児介護などが市場労働と両立するような制度づくりなど、資本の側の譲歩を一定程度引き出すことに成功した。

しかしその一方で、資本は労働力再生産の女性への依存を克服する努力を重ねてきたのではないだろうか。生殖技術の「進歩」は女性の市場における労働力商品化を推進する一方で、女性身体を資源化し、かつ生殖技術を含めた家事、育児、介護などの再生産領域を巨大な市場へと拡大してきた。人材派遣業などの労働力商品の直接的取引産業は大きく成長し、今やそのピークを迎えているのかもしれない。

しかし現在私たちの生きている市場社会は、あらゆるものが商品となり、価格により評価されうる社会である。現状はこの労働により生計を立てる人々は確実に存在する。人権と労働は対立するものではない。労働者の保護はまさに人権問題である。

性売買は暴力か労働か？という議論は、家事労働賃金要求運動への「性別役割の固定化につながる」というフェミニストの反発を想起させる。現実には大半の家事を女性が担っている。役割の固定化につながるという懸念によって、

すでに行っている労働の正当な評価を否定することは、それがたとえ不本意な仕事であっても、ありえないだろう。しかし家事労働にはそのような現実の直視を回避しようとする志向性が作用しがちである。同様に、現に性売買によって生計を立てている人々の、その労働環境を安全なものとし、労働者として保護され、労働条件をよりよくしたいという要求は、それが性売買という仕事でなければ、誰にも異論はないだろう。労働力商品が一般商品ではないことと同様に、性的商品もまた、労働力商品以上に保護と配慮が必要な商品である。その実情が商品化の是非を論じて直視されないとすれば、労働者の権利を含めた人権が著しく脅かされる状況を見ないことになりかねない¹⁵。

労働力商品はそれが生きている人間そのものであるがゆえに、労働運動が闘われ、一定の妥協としての労働者保護政策を獲得してきた。しかし労働力商品への依存を減らすための技術革新とグローバリゼーションの進行につれて、労働力商品は限りなく一般商品に近づきつつある。このことは労働力商品そのものの交渉力の低下を意味する。そして生殖＝出産としての労働力再生産労働の交渉力も、同様に低下していると考えなくてはならないのではないだろうか。

おわりに

欲望の動員により持続する資本主義というシステムは、労働力と同様に、性的主体を作り出し、それによって支えられてきた。70年代フェミニズムは、この男性に偏在してきた性的主体性の揺らぎと変容を誘発してきたと言える。労働力の位置付けと戦略が大きく変化しつつある今日、マルクス主義フェミニズムの初期に提案されながら早々に「なかったこと」になっていた、労働としてのセクシュアリティ論の再発見は、フェミニズムの資本主義批判の可能性をあらためて示唆するものである。本稿は「産む性」の価値低下、および性的主体性の変容の資本主義、および性の商品化にもたらしうるインパクトについての考察の途上で書かれたものであり、多くの課題は今後に残されている。

¹⁵ 近年の「長時間労働是正」政策によるサービス残業の増加や、不法移民が自らの違法な処遇を訴えることが不可能であることなども、同様の構造にあると思われる。

【主要参考文献】

- 足立真理子 (1992) 「《再生産》の地平——性分業と労働概念3:フェミニスト・クリティークの可能性を求めて」『情況』03-05 (22)
- Veronica Beechey, 1987, *Unequal Work*, Verso. 『現代フェミニズムと労働: 女性労働と差別』高島道枝・安川悦子訳 (1993)、中央大学出版部
- Illaria Bussoni & Raffaella Perna (ed.), 2014, *Il gesto femminista: La rivolta delle donne: nel corpo, nel lavoro, nell'arte*, DeriveApprodi.
- Giovanna Franca Dalla Costa, 1978, *Un lavoro d'amore: la violenza fisica componente essenziale del trattamento maschile nei confronti delle donne*, Edizioni delle donne. 『愛の労働』伊田久美子訳 (1991)、インパクト出版会
- Mariarosa Dalla Costa, 1972, *Potere femminile e sovversione sociale*, Marsilio Editore. グループ7221訳 (1980) 「女性のパワーと社会の変革」ザレツキイ他『資本主義・家族・個人生活: 現代女性解放論』、亜紀書房
- マリアローザ・ダラ・コスタ『家事労働に賃金を: フェミニズムの新たな展望』伊田久美子・伊藤公雄訳 (1986)、インパクト出版会
- Silvia Federici. 1975, *Salario contro il lavoro domestico*, a cura del Collettivo Femminista Napoletano per il salario al lavoro domestico.
- Leopordina Fortunati, 1981, *L'Arcano della riproduzione*, Marsilio Editore.
- 古田睦美 (1997) 「マルクス主義フェミニズム: 史的唯物論を再構築するフェミニズム」江原・金井編『ワードマップ フェミニズム』新曜社
- 古田睦美 (2002) 「家事労働をどう捉えるか: 家事労働論争からアンペイド・ワークの測定へ」季刊家計経済研究 No.56、家計経済研究所
- 姫岡とし子 (2004) 『ジェンダー化する社会』岩波書店
- 伊田久美子 (1992) 「資本主義批判の可能性: マルクス主義フェミニズムとラディカル・フェミニズムの共有するもの」現代思想 20(1)
- 伊田久美子 (2010) 「マリアローザ・ダラ・コスタ『女性の力と社会の変革』」井上・伊藤編『社会学ベーシックス: 近代家族とジェンダー』世界思想社
- 伊田久美子 (2012) 「再生産労働概念の再検討: 構造調整プログラムを中心に」女性学研究 19、大阪府立大学女性学研究センター
- 伊田久美子 (2014) 「70年代イタリア・フェミニズム史の再検討: 家事労働賃金要求運動を中心に」女性学研究 21、大阪府立大学女性学研究センター
- 伊田久美子 (2015) 「70年代イタリア・フェミニズムにおける家事労働賃金要求運動——「労働」の定義をめぐる闘いとその「消去」」世界人権問題研究センター研究紀要 20、世界人権問題研究センター
- 磯野富士子 (1960) 「婦人解放論の混迷——婦人週間にあたっての提言」: 上野千鶴子編 (1982) 『主婦論争を読む』II、勁草書房に所収
- Selma James, 1972, *Women, the Unions and Work, or What Is Not To Be Done*, Notting Hill Women's Liberation Workshop; Falling Wall Press.
- 菊地夏野 (2015) 「セックス・ワーク概念の理論的射程: フェミニズム理論における売

- 買春と家事労働」人間文化研究 24、名古屋市立大学
- Annette Kuhn & AnnMarie Wolpe (ed.), 1978, *Feminism and Materialism: Women and Modes of Production*. Routledge and Kegan Paul. 『マルクス主義フェミニズムの挑戦』上野千鶴子他訳 (1984)、勁草書房
- Maria Mies, 1986, *Patriarchy and Accumulation on a world scale: women in the international division of labor*, Zed Books. 『国際分業と女性』奥田暁子訳 (1997)、日本経済評論社
- Juliet Mitchell, 1971, *Woman's Estate*, Penguin. 『女性論』佐野健治訳 (1973)、合同出版
- Maxine Molyneux, 1979, *Beyond the Domestic Labour Debate*, *New Left Review* I/116.
- Joan W. Scott, 1988, *Gender and the Politics of History*, Columbia University Press. 『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳 (1992)、平凡社
- SWASH編 (2018) 『セックスワーク・スタディーズ』日本評論社
- 上野千鶴子 (1984) 訳者解説「マルクス主義フェミニズムの挑戦」『マルクス主義フェミニズムの挑戦』、勁草書房
- 上野千鶴子 (1990) 『家父長制と資本制：マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店
- 上野千鶴子 (1995) 「「労働」概念のジェンダー化」：上野千鶴子 (2002) 『差異の政治学』岩波書店に所収